

『強制収容所のバイオリニスト』

2017年04月04日

私は、海外旅行を多くは経験していないが、アウシュヴィッツ=ビルケナウを訪ねたことが最も深く心に残っている。先に、第二強制収容所のビルケナウに行った。家畜列車で運ばれたユダヤ人たちは大きな門をくぐり、疲れ切った状態で降車場に降ろされる。ここで、ガス室に送られる者と労働に従事させられる者が選別される。私は降車場に立ち、映画でしばしば観た「門」を見た時、体が震えた。ドイツ人らしく規則正しく建てられた収容所は恐怖の殺人工場であった。クラクフで買い求めた赤いバラを手向け、黙禱を捧げた。ドイツ軍が敗走する時、爆破したガス室跡は、崩れたレンガの山だった。危険なので入ると書かれていたが、持って帰ると書いてなかったので、3cmくらいのレンガ片を一つ持ち帰った。人間の罪の象徴で、私の中にもあるものと思い、書棚に置いてある。

右の写真は収容者たちの寝棚で、私は中段に体を横たえてみた。3段寝棚で、1段に7人くらいで寝ていた。私が横たわった所は、古典的名著『夜と霧』を著した فرانクル が寝ていた寝棚だと想像している。それから、アウシュヴィッツに行った。人はこんな残酷なことができるのかと信じられない展示であった。強制収容所で地獄を経験した人々の著作は数多くあり、心に突き刺さってくる。人類が体験した大悲劇であるが、それにもかかわらず、戦争は続き、レイシズム、ヘイトスピーチは止むことはない。



101歳になるポーランド人のヘレナ・ドゥニチ・ニヴィンスカ氏が『わたしの生の道』を著した。それを、ポーランド児童文学翻訳家の田村和子氏が『強制収容所のバイオリニスト ビルケナウ女性音楽隊員の回想』というタイトルで、出版している。ポーランド人の著作に興味を持ち、読んでみた。壮絶な回想録である。ヘレナ氏は幼い時から、バイオリンを習い、教師になれるまで上達していた。彼女は、ドイツ軍に抵抗する地下活動をしていた人に部屋を貸していたという嫌疑がかけられ、母親と共に逮捕され、刑務所に収容された。それから、家畜列車で、ビルケナウに送られた。

強制収容所では、言語を絶する貶めを受ける。飢えと渇き、寒さと強制労働、この上ない不衛生。中でも、飢えは深刻である。腐ったような野菜が浮かぶスープと一切れのパンは体力を日々に奪って行く。そして、親衛隊員から蔑みと非道な暴力に見舞われる。瀕死の人はガス室に、死者は死体焼却炉に運ばれ、毎日、焼却炉の煙突から、煙が立ち上っている。収容者同士での諍い、奪い合いは絶えないが、彼女は、人間性を守り、互いに助け合い、共感しようとする人々はおり、生涯にわたる友情と連帯が生まれたと書いている。

バイオリンが弾けたので、「音楽隊員」に命じられる。音楽隊は囚人を労働に送り出し、迎える時に行進曲を演奏する。楽しい娯楽音楽を演奏する時もあったという。この隊に入れば、命は助かる。演奏は収容者たちの慰めになったが、死を免れたことへの嫉妬もあった。彼女たちは苦しみから逃れようと必死の練習をする。優れた指揮者であったユダヤ人女性が急死し、音楽隊は弱体化し廃止となる。マイナス20度の極寒の中、死の行軍を強いられ、別の収容所に辿り着いた時、ドイツは敗北を迎え、解放される。彼女は、「バイオリンがなかったら、生きのびることはできなかったでしょう」と語り、エピローグで「強制収容所で体験したことだけは忘れようにも忘れられません。それは警告のための記憶です」と書いている。戦争は人を狂気にするという警告である。